

アリの宮（青垣町）

佐治川の上流、東芦田郷〈ひがしあしだごう〉のお宮の前では、七日七夜の雨ごいがおこなわれていました。

七日目の夕方になっても、かわききった空には、一片の雨雲も見あたりません。一心にいのりつづけた里人たちは、目をあかくして、つかれきっていました。

「だめだ。ことしは、田植えもあきらめにゃならんわ。」と、かたをおとした五作が、きゅうに、目を見はりました。

「おい、ここに、でっかいアリがいるぞ。おや、アリの行列だ。」

「ううん、ふしぎだ。いままで、アリの行列はなかったのに。どこへつづくか、いってみよう。」

里人たちは、だれいうともなく、ふらふらと、アリの行列をたどってあるきだしました。

一キロメートルばかりいくと、そこには、みずみずしい草がしげっていました。

「この下に、水がありそうだ。それ、ほりだせ、ほりだせ。」と、里人たちは土をほりだしました。

「ワアー、水だ。水だ。水がわきだした。」と、里人たちはおどってよろこびました。

「アリのおかげだ。アリをまつろう。」と、この泉にアリづかをつくりました。

その後、米や麦にアリがつくと、この宮の砂をまくときくといわれ、遠くからアリよけのおふだをいただきにくるようになりました。

